

B年復活節第3主日 ルカ24章36―48節

〔直訳〕

36 だがこれらのことを 彼らが 話していると

彼が 立った 彼らの間に

そして 彼は言う 彼らに、

「平和が あなたがたに」。

37 だが脅えて、 そして 怖くなって

彼らは思った 亡霊を 観ていると。

38 そして **彼は言った** 彼らに、

「なぜ かき乱されて あなたがたはいるのか

そして 何ゆえ 疑いが 上っているのか あなたがたの心に。

39 見なさい 私の両手と私の両足を

というのは 私自身である。

触れなさい 私に そして 見なさい、

というのは 亡霊は 肉と骨を 持たない

とおりに 私が あなたがたが観る 持っているのを。

40 そして このことを 言いながら

**彼は示した** 彼らに 両手と両足を。

41 だがまだ 信じないで 彼らが 喜びから そして 驚いていると

**彼は言った** 彼らに、

「あなたがたは持っているか 何か 食べられる物を ここに」

42 だが彼らは 手渡した 彼に 焼いた魚の 一切れを。

43 そして 取って 彼らの前で **彼は食べた**。

44 だが**彼は言った** 彼らに対して、

「これらは 私の言葉

と ころの 私が話した あなたがたに対して

まだ いながら あなたがたと一緒に、

すなわち 満たされねばならない

45 すべてのことが 書かれていることが モーセの律法と預言者と詩編の中に 私について」。

そのとき **彼は開いた** 彼らの 知る力を 悟るために 聖書を。

46 そして**彼は言った** 彼らに 次のことを

「このように 書かれている

苦しむことが キリストが

そして 復活することが 死者たちから 三番目の日に、

47 そして 宣べ伝えられることが 彼の名前の上に

悔い改めが 罪の赦しのために すべての民のために。

始めて エルサレムから

48 あなたがたは 証人 これらのことの。

〔新共同訳〕

（35）二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。）

36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。 37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。 38 そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。 39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおおり、わたしにはそれがある。」 40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。 41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。 42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、 43 イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。 44 イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」 45 そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、 46 言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。 47 また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、 48 あなたがたはこれらのことの証人となる。」

①文脈

① イエスは「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」と約束したが（九 22）、神はこれを成就する。それによって神は、忠実な義人、罪を犯さなかったのに苦しみを受けた御子イエスの正しさを立証した。神が起こした復活の出来事がルカ 24章で語られる。

② 週の初めの日の明け方早く、女性たちは墓を訪ねたが、イエスの遺体は見当たらなかった。女性たちは輝く衣を着た二人の人からイエスの復活を知らされる。そこで女性たちはイエスの言葉思い出した。使徒たちは彼女たちを信じなかったが、ペトロは墓へと走り、この出来事に驚きながら家に帰った（二四 1－12）。

③ ちょうどこの日、二人の弟子がエルサレムからエマオへ向かって歩きながら、エルサレムで起こった一切の出来事について話し合っていた。イエスこそイスラエルを解放すると期待していた二人は、イエスの死が理解できずにいた。イエスは彼らと共に歩き始めたが、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて渡した。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人はすぐにエルサレムに戻った。（二四 13－34）。

④ 35節は 13－34節の「エマオの出来事」と 36節以下をつなぐ橋渡しの節である。「エマオの出来事」にとってパンを裂く瞬間がいかに決定的であったかは、この節で「パン裂きの間に（パンを裂いてくださったときに）」と断っていることから確かである。イエスは弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言うが、弟子たちは恐れる。恐れ疑う弟子たちにイエスは繰り返し語りかけ、行動し、彼らの知る力を開く（二四 35－49）。

⑤ イエスは天に上げられた。弟子たちはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶え

ず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた（二四 50―53）。

## ②構成

### ① 36―37節

この段落は、イエスの昇天を描く 50―53節に対応している。この段落では『平和があるように』と述べた」イエスに対して、弟子は「脅えて、怖くなった」が、50―53節では「祝福する」イエスに対して、弟子は「ひれ伏して」いる。恐れていた弟子たちがひれ伏す者になるのだが、この変化が引き起こされる過程が 38―48節で明らかにされる。第一段落から第四段落ではイエスが弟子たちに「言った」という表現が用いられ、さらに第一段落から第三段落では「行って、行った」という描写が繰り返される。

### ② 第一段落（38―40節）

イエスはなぜ疑うのか、私自身だと「言って」、両手と両足を「示した」。

### ③ 第二段落（41―43節）

イエスは食べ物を持っているかと「言って」、手渡された物を彼らの前で「食べた」。

### ④ 第三段落（44―45節）

イエスは私について聖書に書かれていることは必ず成就すると語っていたと「言って」、弟子の知る力を「開いた」。

### ⑤ 第四段落（46―48節）

イエスはキリストの受難と復活、悔い改めの宣教は聖書に予告されており、弟子たちはそのことの証人だと「言った」。

## ③弟子への顕現（36―37節）

① 弟子たちの間にイエスが立ち、「平和があなたがたに」と告げるが、彼らは「脅えて、怖くなった」、亡霊を見ていると思う。エルサレムからエマオへ向かった二人の弟子が、イエスがパンを裂いて渡したとき、二人の目が開け、イエスだと分かったと語るのを弟子たちは聞いていた。しかし、弟子たちはエマオの出来事の報告を受けても、それを信じられずにいた。

## ④イエスの言葉と行動（38―48節）

### ① 第一段落（38―40節）

イエスは「脅えて、怖くなった」弟子たちに対して、「なぜかき乱され」、「何ゆえ疑うのか」と問いかける。問いを繰り返すことによって、弟子たちの恐れや疑いが全く根拠のないものであることを示す。さらに「私の両手と私の両足を見なさい」と述べ、「私自身である」と語りかけて、「両手と両足を示した」。イエスの言葉には「私」が繰り返されており、まぎれもなくイエス自身であることを示している。この両手と両足には傷跡があり、それはこの人物がイエスであることとしると同時に、裏切った弟子たちの罪を黙って担ったイエスの愛のしるしでもある。傷ついた両手と両足に触れるようにとの言葉に込められたイエスの愛が、弟子たちを恐れから解放する。

### ② 第二段落（41―43節）

弟子たちの心に喜びが生じるが、まだ「信じないで、驚いている」。「だが」彼らはイエスの求め

に応じて、一切れの魚を手渡した。「信じられなかった、だが手渡した」という彼らの態度に、あまりのことに呆然とする彼らの姿が表されている。この弟子たちの「前で」イエスは魚を食べる。この「前で」は「一緒に」という意味にもなる（ルカ一三 26参照）。「一緒に食べた」の意味であれば、弟子との親しい交わりが再開されたことをも表している。死を乗り越えて継続するイエスとの関わりが弟子の不信仰を癒していく。

◎ 第三段落（44―45節）

この段落の冒頭にも、第二段落の冒頭と同様に、「だが」という接続詞が置かれている。「だが」と直訳した語は文脈によって「そして・しかし・さて」という意味を持つ。この「だが」はここでも「しかし」の意味だろう。そうであれば、弟子は不信仰から完全に脱却しているのではない。なにがしかの疑いを抱いている弟子ではあるが、「だが」イエスは彼らに語りかける。イエスは彼の受難と復活の必然性を思い起こさせ、聖書を悟らせるために彼らの知る力を「開いた」。

④ 第四段落（46―48節）

この段落ではもはや「だが」が冒頭に置かれずに、「そして」が置かれている。亡霊を見ていると恐れられた弟子に両手と両足を示し、喜んだがまだ信じられずにいた弟子の「前で」魚を食べ、それでも信じきれなかった弟子の知る力を開いたことによって、疑いが完全に取除かれたからである。知る力が開かれることによって、聖書から覆いを取り去られ（2コリ三 14）、聖書に書かれていることの意味を知り、弟子たちは証人となる。

⑤ イエスの言葉と行動が弟子を変えていく

④ 47節に「悔い改めが宣べ伝えられる」とあるが、「悔い改め」とは神に立ち帰ることである。イザヤ 44章 22節に「わたしはあなたを贖った」とある。イエスの十字架は罪の赦しを告げる神の呼びかけである（1コリ 1 18）。神はイエスを通して、私たちの背きと罪を吹き払い、「立ち帰れ」と呼びかけている。神のこの呼びかけを証しする証人として、弟子たちは遣わされていきます。

⑤ 37節で、復活したイエスを亡霊だと思い恐れていた弟子たちは、50―53節では喜びの内にイエスを礼拝し、神を賛美する者へと変えられている。38―48節は、この変化がどのように起こったかを描いている。弟子を変えるのはイエスの言葉（彼は言ったこと彼の行動（40節「示した」、42節「食べた」、45節「開いた」）である。

◎ エマオに向かう途中で、パンを裂いてくださったときにイエスだと気づいたと語る二人の弟子の報告を聞いても、イエスが自分たちの間に立ち、「平和があなたがたに」と語りかけても、弟子たちは信じることができない。イエスを見ても、イエスの声を聞いても「脅えて、かき乱され、疑う」弟子たちである。しかし、イエスはひたすら語りかけ、行動を示し続けると共に、弟子にも行動を求めている。

④ 「何か食べられる物を持っているか」（41節）と尋ねたイエスに、弟子たちは一切れの焼いた魚を手渡す。弟子たちの行動を引き出したのはイエスの言葉である。信じることをできない弟子たちが、それでもイエスの言葉に従うことによって、イエスの復活と罪の赦しを信じる者へと変えられていく。確信があるから始めるのではなく、疑いの中にあっても、イエスの示す方へと歩み出す。赦しを告げ、復活の確かさを示すイエスの言葉と行動、そして神が起こした出来事を解き明かす聖書の言葉に支えられて、弟子たちは信じて証しする証人となっていく。